

特集
すいよう

「ロー対ウェイド」判決って？

テキサス在住のジェーン・ローさん（仮名）が、ダラス郡のヘンリー・ウェイド検事に対して起こした訴訟だったため、「ロー対ウェイド」と呼ばれます。ローさんは、テキサス州では妊娠した人の命に危険が及ばない限り中絶できなかったことから、訴訟を起こし最高裁まで争いました。

ロー対ウェイド判決50年



子どもを産むのか産まないのか、またいつ、何人産むのか。生殖にかかわる選択と健康は女性の基本的な人権です。米国で、この考え方の基盤となった「ロー対ウェイド」判決から、今年で50年。女性たちが運動で勝ち取ってきたこの権利は、幾度も逆流にさらされ、昨年6月には同判決が連邦最高裁判所で覆されるという困難に直面しました。それでも権利の後退を許さないと街頭に出て、力強く歩みわたっています。

(ワシントン) 石黒みずほ 写真も

3・8

きょう

国際女性デー

50周年記念集会参加者の声

中絶選ぶ権利は全ての人の
アケーシャさん(13)

最高裁が判決を覆した時、自分の将来を考えると恐ろしくなりました。産むか産まないかの選択肢にとどまらず、レイプなどによって妊娠してしまった場合にはなければならない選択肢です。中絶は違法とすべきではないし、中絶を選ぶ権利は全てのの人に保障されるべきです。



私的な決断に権力者が介入
マーシャ・ピアターさん(72)

私は44年間看護師として働いてきて、難しい決断に頭を抱える女性たちをたくさん見てきました。これほど私的な決断に権力者が介入するなど信じられません。最近ではより多くの女性が投票を通じて意思を示すようになりました。私たちの権利を取り上げるならば、議会での議席を失うと訴えたいです。



産まない選択できなかった母
キャサリン・マクエイドさん(75)

「ロー対ウェイド」判決により、女性は教育を受け仕事に就く機会を手に入れました。私の母は13回妊娠し、12人の子どもを産み育てました。きょうだいは大切な存在ですが、産まない選択をできなかったことが、どれだけ母を経済的、精神的、身体的に苦しめていたかを知っています。権力者たちには中絶の権利を取り戻すまで私たちは声を上げ続けると示したい。



女性の権利歩み前へ

権利「取り返すまで立ち止まらない」

絶を憲法で保障された権利だと判断しました。根拠となったのは、ライブラー・シールを憲法上の権利として認めた米国の修正第14条。この判決で全米で中絶が合法化され、リフ・ロックス（性と生殖に関する健康と権利）の重要な役割が高まりました。

米国の中絶をめぐる歴史

19世紀初めごろ
中絶に対する法規制なし

1880年
すべての州で中絶が禁止され、全米で中絶は重罪だった（いくつかの州では母体の命に影響があると判断された場合、認められた）

1967年ごろ～
アラスカ、ハワイ、ニューヨーク、ワシントンの4州で中絶禁止法が完全に廃止の動き

73年
「ロー対ウェイド」判決で、人工妊娠中絶は憲法上の権利と認められる

2007年
妊娠後期の中絶を禁止する法律に合憲判決

16年
最高裁がテキサス州の中絶規制に違憲判決

22年
ロー対ウェイド判決を覆し、中絶の権利に憲法上の保障を認めず

23年
米食品・医薬品局（FDA）が、経口中絶薬の薬局での販売を許可

レイアウト・斉藤和音



2022年7月 ワシントン



2022年10月 ワシントン



2023年1月 ウィスコンシン州